

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 森 功次

本論文は、サルトルの1930年代後半から50年代前半までの前期思想を「芸術哲学」という観点から考察するものである。その際著者の狙いは、作家としての、あるいは芸術批評家としてのサルトルを扱うことにはなく、哲学的著作の内に見られる彼の芸術観を、時系列的な変化・発展に即して明らかにすることに置かれる。

第1章は、主として初期サルトル(30年代後半から40年ごろまで)の「想像力」論の分析にあてられる。サルトルは芸術作品の美的経験を想像経験とみなし、また「芸術作品とは非現実的なものである」と主張しているが、筆者は、芸術作品の想像経験は外的アナログン(としての作品)を介する点で、常に現実世界との接点を保持していることを強調し、このことを通して、サルトルの芸術論を想像世界への逃避として批判する従来の解釈を斥ける。ちなみに、この章は本論文の中で最も充実したものといえる。

第2章は、戦争期のサルトルを代表する『奇妙な戦争』(1939-40年)と『存在と無』(1943年)を対象とする。筆者によれば、若きサルトルは芸術創造を人生の唯一の意味とみなす価値観を採用していたが、戦争期に入ると実存主義的で個別主義的な価値観に移行し、その結果として、芸術創造によって人生の究極の意味を実現すること、あるいは、芸術を媒介として他者に状況を普遍的に伝達することは不可能である、という悲観的な立場にいたる。

第3章以降では、戦後期のサルトルの芸術論が道徳論との関係に即して検討される。まず筆者は、『文学とは何か』(1947年)を取り上げ、『文学とは何か』のサルトルが『存在と無』の頃とは一転して、文学を「普遍性の感覚」と結びつけていることに着目するとともに、『文学とは何か』の文学論のうちに理想的状況に関わる理想論と現実的状況に関わる現実的提言とを峻別し、従来の解釈がしばしば両者を混同してきたことを批判する(第3章)。続いて筆者は、遺稿『道徳論ノート』(1947-8年頃)の解説を通して、この時期のサルトルが芸術作品を介した作者と観賞者の関係を人間関係の理想的モデルとすることで、『存在と無』の他者観を乗り越えようとしていた、と論じる(第4章)。最後に筆者は『聖ジュネ』(1952年)の最終章を取り上げ、不道徳な作品であっても、それが観賞者の道徳観を開示するという鏡の役割を果たす限りで、美的経験の対象として正当化される、と考える点にサルトルの独自性がある、と主張する(第5章)。

解釈がやや図式的となるところがあり、また、各章で展開される議論の連関についても再考の余地が残されているとはいえ、サルトルの多岐にわたる前期思想を「芸術哲学」という観点からとらえる試みは世界的に見ても稀であり、今後のサルトル研究に資するところは大きいと評価される。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。